千葉県日独協会通信　No.25　－2002年（平成14年）10月30日

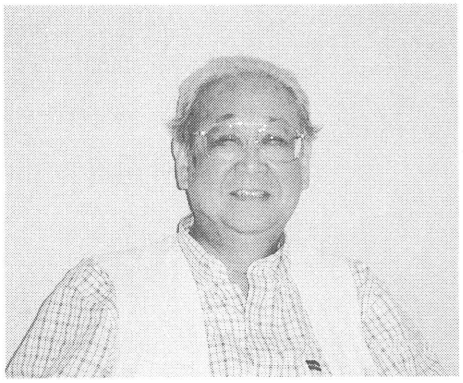
Die Eiche

ディ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町2-518-1 第二ワールド ナーシング ホーム内
TEL 047-461-9111　FAX 047-461-7010

ビール祭り開催



鈴木氏

今年のビール祭りは夜来の大雨が午前中迄降っていた9月28日(土)に、JR西千葉駅前の西千葉プラザホテル一階、喫茶「サン」で行われた。悪天候で出席者が大分減る事が懸念されたが、平尾浩三会長が大学関係者に呼びかけて下さった事も有り、欠席者七名にも拘らず31名の参加者で会場は満員に。

2時40分より当協会鈴木淑弘理事による講演“カール・ギュツラフと我が国初の日本語「聖書」”がスタート。聖書研究会にも所属している鈴木氏は、船橋市役所を辞めた時の退職金で購入した260万円の聖書を参加者に見せてくれた。この大きくて分厚い聖書はグーテンベルクの活版印刷で作られた物の復刻版。(本物の内の一冊は慶應義塾大学が七億円で購入し、現在は藤沢校舎の金庫に保管されていて、見せて貰うのに20万円の保険料他が掛かると言われた由)豊富な知識と軽妙な洒落で語られた内容には参加者の誰もが感心、「大学の講義より素晴らしい」と大評判であった。

会場が喫茶店の為、会員の皆さんにも手伝って貰い、4時より恒例のビール祭り。「Ein Prosit」で乾杯後、しばし歓談。初参加の人とも交流後、土生(はぶ)氏のアコーディオンで富士吉田市から参加された安藤さんの独唱。次いで皆でドイツ民謡を合唱。一人一分の自己紹介等も行い、大いに飲んで6時に散会。

尚、平尾会長よりおにぎり、鈴木理事より大きな梨の差し入れを頂戴致しました。

カール・ギュツラフと我が国初の日本語「聖書」

当協会常任理事　鈴木　淑弘

世界一のベストセラー、それは「聖書」である。この聖書は旧約三十九巻、新約二十七巻の六十六巻から成っているが、紀元前一三〇〇年頃から紀元二世紀に亘って書き継がれ聖書としての形が整えられたと言われている。聖書の原文は主にヘルブ語で書かれたが、最初の翻訳は紀元前三～二世紀の頃、エジプトのアレキサンドリアでのギリシャ語訳で、「七十人聖書」と呼ばれている。以来、時代と共に各国語に翻訳され、何億冊という世界最大のベストセラーとなっているのである。それでは日本ではいつごろ聖書の翻訳が行われたのだろうか。

我が国へのキリスト教伝来は戦国期の一五四九年、「イエズス会」のフランシスコ・ザビエルによりもたらされ、やがて織田信長などの支持を受け急速に普及し、最盛期にはキリスト教徒（キリシタン）は六十万人を越えたと伝えられているが、未だ聖書の翻訳は行われなかった。しかし布教活動の為には聖句や「聖書」の一部、例えばモーゼの十戒等の翻訳は行われていたようであるが、豊臣秀吉から始まり徳川時代に、より苛烈を極めたキリシタン弾圧により、それらの資料は皆無と言える程残されていない。

このように厳禁されたキリスト教が再び我が国に押し寄せたのは幕末期である。産業革命以来、世界情勢は大きく変化し、イギリスを初めヨーロッパの国々はアフリカ、アジア等に植民地を築き、日本へも触手を伸ばし始め、アメリカは捕鯨の中継基地を求め我が国へ来航した。このような時代背景の中で日本へのキリスト教伝道が準備され、その為の最大の武器として「聖書」の日本語訳を志す宣教師が登場するようになった。その最初の宣教師がカール・ギュツラフである。

ギュツラフは一八〇三年、ドイツのピリツで生まれ、成長してルーテル教会の宣教師となり東南アジアの伝道に従事し、英領マカオに滞在中、三人の日本人漁師に出会った。彼らは尾張国（現愛知県）から米を江戸に運ぶ千石船・宝順丸の乗組員であった。一八三二年の秋、宝順丸は船長以下十四名が乗り込み江戸へ向かったが、遠州灘で台風に会い、一年数ヶ月太平洋を漂流し、カナダのブリティッシュコロンビア州に漂着した。生き残ったのは岩吉、久吉、音吉の三名のみであった。三人は現地人の奴隷になっていたが、イギリス商船に助けられロンドン経由で日本に帰還すべくマカオに滞在していたのである。（裏面へ続く）

～今後の催物案内～

■ドイツ軍人病没者追悼慰霊祭

日時：11月24日(日) 11:00 AM～
場所：船橋市営習志野霊園内
　　JR総武線津田沼駅北口よりバスで15分
　　「自衛隊前」下車。正門の正面に向かって
　　左手50mの角を右折、直進徒歩7分右側。
尚、当日はドイツ大使館よりヴァルナー海軍大佐及び後任のゲーペル陸軍大佐が来園予定ですので直会は歓送迎会を兼ねて行います。（実費各自負担2000円以内）

■クリスマスの集い【(財) 日独協会主催】

日時：12月16日(月) 18:30 PM～
場所：東京会舘(日比谷) JR有楽町駅下車徒歩5分
会費：10,000円(同伴者9,000円)
申込：郵便振替口座 No.00150-8-55593
　　(財) 日独協会宛
　　備考に千葉県日独協会会員と記入
その他：福引用の景品を1点御持参下さい。尚、福引特賞はドイツ往復航空券(ルフトハンザ)1名。

（続き）そしてこの時ギュツラフに会い、「聖書」の日本語訳の教師役を果たした。これが世に言う「ギュツラフの聖書」（ヨハネ福音書)であり、日本語訳の嚆矢（こうし）となった。しかし当時は未だ「日本語」は無く尾張弁であり、かつまた三人の無教養から、その翻訳は極めて幼稚な物であった。ヨハネ伝の始まりを比較すると次のような物である。

現代語訳「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった」

ギュツラフ訳「ハジマリニ カシコイモノゴザル。
コノカシコイモノ ゴクラクトトモニゴザル。
コノカシコイモノゴクラク」

ギュツラフは「聖書」の翻訳に約一年の月日を費やし1837年シンガポールで出版した。その部数は1690冊であった。

この年の夏ギュツラフは三人の漁師と他の漂流民四人を伴い「モリソン号」で日本に向かったが、浦賀沖で砲撃(外国船打払令)され上陸する事が出来ず、漁師達は故国の土を踏めず、「ギュツラフの聖書」もその役割を果たす事は無かった。故に現存する「ギュツラフの聖書」は国内に8冊(明治学院等)、海外に8冊の16冊のみと言われている。

その後も「聖書」の日本語への翻訳は来日した宣教師や牧師により行われ、ゴーブル、ブラウン、ヘボン、ラゲ等の訳として残された。明治中期からは日本人による翻訳委員会による「聖書」(文語体)、更には1950年代以後数次に亘っての現代語訳が行われ、我が国においても「聖書」は隠れたベストセラーとなっているのである。

日独交流コンサートを終えて

こぶしの会　吉田千賀子（会員）

去る7月28(日)、八千代市市民会舘で開催されました日独交流コンサートは、お蔭様で大変盛会裡に終了致しました。千葉県日独協会の御後援を受け、また金谷専務理事経由で塩水港精糖株式会社の「オリゴのおかげ」の寄付も頂き、物心両面で大変お世話になりました事を、この紙面をお借りしまして改めて厚く御礼申し上げます。

ドイツ・ウルム市から来日した弦楽室内合奏団の団員は、酷暑の日本でハードスケジュールにも拘らず立派な演奏をされ、流石音楽の国からいらしただけの事はあると感服致しました。私達との合同演奏曲につきましては、何分双方がその朝初めて顔を合わせてたった一度のリハーサルだけで本番を迎えると言う厳しい条件であった為、不安で一杯でした。しかしその割には良く出来たのではないかと自画自賛しております。音楽は人の心を一つにしてしまう不思議な力を持っている事を実感致しました。

演奏会に続く歓迎会では一同すっかりリラックスされ、一緒に歌ったり身振り手振りで交流したり二時間があっという間に過ぎてしまいました。日本に初めて足を踏み入れたドイツ人は、ウルム出身者であったという国枝副会長のお話に一同びっくり致しました。

手探りで始めた今回の活動でしたが、多くの方々の暖かい御協力を頂き、ささやかですが日独交流に貢献出来ました事はとても幸せでした。今年はワールドカップが日韓両国に於いて開催され、ドイツ・チームの活躍は未だ人々の目に焼き付いておりますが、それに重ねて暑い夏のこのコンサートの思い出は、私にとりまして生涯忘れ得ぬものとなりましょう。今回、千葉県日独協会の皆様とお知り合いになれました事も大変嬉しく、これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。(当協会に本年入会)

合同演奏

歓迎会で挨拶する国枝副会長（右端）と通訳の堀江氏